

『シュリンガーラプラカーシャ』における rasāviyoga について

本田義央

0. ボージャ (Bhoja, 11 世紀) は、その主著『シュリンガーラプラカーシャ』(Śṛṅgāraprakāśa) において、シュリンガーラあるいは思念 (abhimāna) あるいは自我意識 (ahankāra) を、その他の個別的なラサを包括する上位のラサとして立てる独特のラサ理論を構築した¹。そしてボージャは、文学作品は必ずラサを伴っていないなければならないとした²。本論文では、彼がいう「ラサを必ずともなっていること」(rasāviyoga) が、文学作品に関してどのように成り立つのかということを検討する。

1. ボージャは、ラサを必ずともなっていることを主要なテーマとする『シュリンガーラプラカーシャ』第 11 章で次のようにいう³。

恋をしている女性 (kāmīni) の身体 [に卓越した美しさを生ぜしめる主要不可欠な手段がその女性に恋人への愛があることであるの] と同じように、欠点なく (nirdoṣa), 美質があり (guṇavat), [修辞によって] 飾られた (alamkṛta) 文学作品の身体 (kāvyasārīra) に卓越した美しさがおこ

¹詳しくは本田 (2005) を参照せよ。

²ラサを必ずともなうこと (rasāviyoga) は、ボージャが『シュリンガーラプラカーシャ』冒頭にあげる十二のサーヒティヤのうちの文学作品に独特の、「欠陥の除去 (doṣahāna)」「美質をとること (guṇopādāna)」「修辞との結びつき (alankārayoga)」「ラサを必ずそなえていること」という四つのうちの一つである。

³ŚP 662.1: nirdoṣasya guṇavato 'lamkṛtasya ca kāvyasārīrasya kāmīnīśārīrasyeva śobhātīśayanīṣpattau rasāviyoga eva prakṛṣṭa upāyo gīyate / yataḥ / kalyā mūrṭiḥ kulam amalīnaṃ yauvanaṃ rūpasampat saubhāgyarddhiḥ priyavacanatā śīlavaidagdhayogaḥ / śālīnatvaṃ vinayaparatey aṅganābhūṣaṇaṃ yat tat premārdrāṃ praṇayini mano nāsti cen nāsti kiñcit //

る (śobhātīśayanīṣpatti) 卓越した (prakṛṣṭa) 手段 (upāya) は、[その作品に] ラサがあること (rasāviyoga) にほかならないといわれる。なぜなら [次のようにいわれている] 「健全な身体 (mūrṭi)・汚れのない家系・若さ・完璧な美しさ (rūpasampad)・強い献身 (saubhāgyarddhi)・好ましく語ること (priyavacanatā)・良い性格と利口さを兼備すること (śīlavaidagdhayoga), 控えめなこと (śālīnatva)・礼儀を重んじること (vinayaparatā) は女性の装飾 (aṅganābhūṣaṇa) である。[しかし] もし恋人 (praṇayin) に対する愛にあふれる (premārdra) 心がなければ、それ [らの装飾] は、なんの役にも立たない。」

恋をする女性が、相手の男性にとって限りなく美しくみえるのは、その女性に身体的な欠陥 (doṣa) や家系上の欠陥がなく、若さや外面の美しさや良い性格などの美質 (guṇa) をそなえているからだけではない。女性の美しさは、身体や、生まれ、言葉遣い、装身具などを前提とするけれども、その女性に恋人に対する愛にあふれる心がなければ、それらはやくにたたない。それと同じように、文学作品が卓越して美しくなる、つまり魅力的なものであるためには、美質や修辞をそなえているだけではなく、ラサをそなえていなければならない。

文学作品の身体 (kāvyasārīra) は、『シュリンガーラプラカーシャ』第 9 章で論じられる欠点なきこと (nirdoṣa) および美質があること (guṇavat), さらに第 10 章で論じる飾られていること (alamkṛta) を前提として、そこに卓越し

た美しさがおこるためには、ラサがあること (rasāviyoga) が不可欠の手段である。

さらにボージャは次のようにもいう⁴。

「女性が、家系・性格・装身具によって飾られていても、私にとって魅力的ではない。[その女性が] 女性たちの間で、勇士の妻として胸をはって生きていないかぎりは。」⁵

ここで直接のべられているのは、女性が魅力的でありうる条件についてであるが、しかし、先の引用とおなじく、ここでもボージャは、女性が魅力的でありうることで、文学作品が魅力的でありうることを説明するためのたとえとしている。すなわち、女性が勇士の妻として誇り、すなわち自尊心をもっていなければ、その女性は魅力的でないのと同じように、文学作品はラサを欠いては魅力を持ちえない、ということを述べているのである。

2. それでは、作品はどのようにしてラサをともしないのか。この点についてもボージャは女性の比喩を用いて次のようにいう⁶。

恋人である女性の身体 (kāminīśārīra) に、足輪や腕輪や耳環などがそれぞれ単独でみられることはない。それと同じように、文学作品の身体 (kāvyāśārīra) には、美質 (guṇa) と同様、押

韻 (anuprāsa)⁷、適切な言葉の選択 (jāti)⁸、隠喩 (rūpaka) などの言葉の修辭・意味の修辭・言葉と意味双方の修辭 (śabdārthobhayālankāra) がそれぞれ単独にみられることはない⁹。したがって、[それら諸々の修辭の] 共存 (saṃsr̥ṣṭi) こそが卓越した (prakṛṣṭa) 装飾 (bhūṣaṇa) として一般的に確定されている (avadhāryate)。そしてそれゆえに、文学作品の身体 (kāvyāśārīra) においても、隠喩などの共存 (saṃsr̥ṣṭi) こそが、特に味があるから (svadamāna)¹⁰、[それこそが] ラサを必ずともなうこと (rasāviyoga) の原因 (hetu) となる。食べ物 (bhojana) においては甘さ・酸っぱさ (āmla)・塩辛さ (lavaṇa)・六味 (śāḍava) [の共存が特に味があり]、装いにおいては衣類・軟膏・花飾り・装身具の [共存が特に味があり]、香においては梅檀・沈香 (agaru)・樟腦・サウラ樹の [共存に味があり]、音楽においては、踊り・器楽と語りの [共存が格別に味わわれ]、愛 (preman) においては怒り (kopa)・執着 (anuśaya)・寛容・共にいる喜びの [共存が格別に味わわれ]、家住期においては、ダルマの達成手段の実行・アルタの達成手段の実行・カーマの達成手段の実行・モークシャの達成手段の実行の [の共存が格別に味がある] ように。

⁷『シュリンガーラプラカーシャ』第10章において24の<言葉の修辭> (śabdālankāra) のうちの15番目に挙げられる。その下位分類として、śrūtyanuprāsa、同じヴァルガの子音を多数使用する vṛtṭyanuprāsa (たとえば、ka 系列音を多用した場合、kavargānuprāsa というよういわれる) などを含む。詳しくは Raghavan (1978, 359-9) を参照せよ。

⁸jāti という修辭は『シュリンガーラプラカーシャ』第10章において、言葉の修辭と意味の修辭の双方に挙げられる。言葉の修辭としての jāti は、<適切な言葉の選択> (bhāṣaucitya) であり、同章では言葉の修辭のうちの第一番に挙げられる。ここでいう aucitya については Raghavan (1978, 181-4) を、言葉の修辭としての<適切な言葉の選択>については Raghavan (1978, 346-8) を参照せよ。一方、意味の修辭としての jāti は、svabhāvokti のことである。

⁹Pollock (1998, 158n97) は、それらの要素が単独で使用されることはない、という理解をとりつつ、美を感じる際にそれらの要素をここに捉えることはなく共存状態にあるものとして捉える、という解釈も不可能ではない、とする。

¹⁰Pollock (1999, 159n99) は 'svadamāno' に対して、'svadamāna' の読みを示唆する。Pollock のいうように、'-hetuḥ' の性に引かれていると考えれば、特に訂正の必要はないかもしれない。

⁴ŚP 662.7: kiñ ca/ alamkṛtāpy anvayaśīlabhūṣaṇair na śobhate māṃ prati tāvad aṅganā / bibharti yāvat pramadāsamāgame na śūrabhāryādṛtagarvitaṃ śiraḥ // (典拠不明)

⁵文字通りに訳せば、「尊敬される (ādṛta) 誇りのある頭部を保っていないかぎりは。」あるいは「尊敬される [かゆえに] 誇りをもって、あたまを保っていないかぎりは。」となる。

⁶ŚP 665.19: prāyeṇa hi guṇānām iva śabdārthobhayālankārānām anuprāsajātīrūpakādīnām kāvyāśārīreṣu kāminīśārīreṣv ivakāṭakakeyūrakuṇḍalādīnām kevalānām adarśanāt saṃsr̥ṣṭir evaprakṛṣṭam bhūṣaṇam avadhāryate / tataś ca bhojana iva madhurāmlalavaṇaśāḍabānām, veṣa iva vastrānulepanamālyavibhūṣaṇānām, dhūpa iva candanāgarukarpūrasiddhakānām, saṅgīta iva nṛttavādyapāthyānām, premanīva kopānuśayaprasādasāṅgamasukhādīnām, gārhasṭhya iva dharmārthakāmamokṣasādhanaṇuṣṭhānānām kāvyāśārīre 'pi rūpakādīnām saṃsr̥ṣṭir eva viśeṣataḥ svadamānorasāviyogahetur bhavati / ataḥ prāg upadiṣṭīpi yatnataḥ prapañcyate /

たとえば、食べ物の場合、単に甘いだけではなく、その酸味や塩辛さなどがまじることによってその食べ物は味わいのあるものとなる。香の場合でも単純な香ではなく種々の香が入り混じってさらによいかおりとなる。また人間が恋をする場合でも、相手に対する怒りなどによってさらに恋は深まるであろう。それと同じように文学作品の場合でも、そこに美質 (guṇa) や種々の修辭 (alāṅkāra) が共存 (saṃsr̥ṣṭi) してこそその作品は味わいのあるものとなるのである。

3. それでは、修辭とラサがともに表現されている例をみてみよう¹¹。

ねえ (sakhi), 「私の額には恋人が自分の手で描いてくれた花輪が輝いているわ」なんて自慢しないで。震え (vepathu) という邪魔する敵がいなかったら、他の子だってそんなものは手に入れたはずなんだから。

二人の女性がそれぞれの恋人との情事の話をしている場面である。一方は、男性が自分の額に描いてくれた花輪の自慢をする。それを聞いたもう一方の女性は、恋人との情事の際に、もし震えがこなかったら、自分も同じような花輪を額に描いてもらっていただろう、という。これは、暗に、自分は震えがくるほど恋愛 (rati) が高まったから、花輪を描いてもらうなどということとはなかったのだ、ということである。

ボージャはこの詩句に対してつぎのように述べている¹²。

ここでは、「禁止」(ākṣepa)¹³、「原因でない原因」(hetu ahetu)¹⁴、「遠回りないいまわし」

¹¹ŚP 708.8, J 458.23: rasapradhāno yathā / mā garvam udvaha kapolatala cakāsti kāntasvahalikhitā mama mañjarīti / anyāpi kiṃ sakhi na bhājanam idr̥śānāṃ vairī na ced bhavati vepathur antarāyaḥ //

¹²ŚP 708.12: atrākṣepahetvahetuparyāyoktibhyaḥ prakṛṣṭaratarirasaprabhavaḥ priyapremābhimānavikatthanāyāḥ priyavasyāyāḥ purastāt svakāntapremanivedanāpara(h) vepathuvyabhicārasūcako 'vāgārambhaḥ prādhānyena pratiyate /

¹³ŚP 656.9: vidhiniṣedhābhyāṃ pratiṣedhoktir ākṣepaḥ / (「肯定と否定によって禁止を述べるのが「禁止」である」)

¹⁴ŚP 616.13: saty api sāmārthyē 'nutpāditasvakāryō vyāhataś ca hetur ahetuḥ / (「効力があるにもかかわらず、

(paryāyokti)¹⁵ [という修辭] にもとづいて、恋人の愛を思念することによって自慢している女友達の前で、自分の恋人の愛を知らしめることを目的とする、卓越した恋愛 (rati) というラサからおこる (prakṛṣṭaratarirasaprabhava), 震えという一時的感情を示唆するものである言葉として [の<感情表現>] (vāgārambha) が主要なものとして (prādhānyena) 理解される。

ここでは、「自慢しないで」(mā garvam udvaha) という箇所に「禁止」(ākṣepa) という修辭 (alāṅkāra) がもちいられている。また、自分の恋人の男性も、もしも自分に震えがこなかったら同じような花輪を描くことができたが、震えがきたので出来なかった、つまり、花輪という結果を男性は生み出さなかったので、「原因でない原因」(ahetu) という修辭も使用されている。また、この女性がいいたいことは、自分は自分の恋人との交わりを震えがくるまで十分に堪能したということであるから、それを「遠回りに表現」していることになる。しかし、これらの修辭は、この詩句においては、主要なものではなく、あくまでもそれらは、究極まで高まった女性の恋愛 (rati) というラサを示すものである。このようなかたちで、文学作品は、ラサを必ずそなえたものとなるのである。

4. 以上みたように、ボージャは文学作品がラサがともなう、すなわち魅力をもつものであることを、女性が魅力をもつものとのようにしてなるか、ということを経験として用いて説明している。文学作品がラサをとともなうためには、女性の魅力が種々の装飾を前提とするように、種々の文学上の美質や修辭の共存が前提となるのである。

略号及び参考文献

J G.R. Joyser, ed. *Mahārāja Bhojarāja's Śṛṅgāra-prakāśa*. 4 vols. Mysore: Coronation Press, 1955-ca. 1969.

結果を生ぜしめなかった原因、あるいは [その効力が] 妨げられた [原因] が「原因でない原因」(ahetu) である」)

¹⁵ŚP 655.14: miṣam uktiprakāro 'vasara iti paryāyokti / (「偽り、表現の仕方、適当な機会が遠回しないいかた (paryāyokti) である」)

ŚP V. Raghavan, ed. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*, vol. 1. Harvard Oriental Series 53. Cambridge: Harvard University Press, 1998.

Pollock, S.

1998 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa and the Problem of Rasa: A Historical Introduction and Annotated Translation. Asiatische Studien/Études Asiatiques* 52-1: 117-192.

Raghavan, V.

1978 *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. 3rd. ed. Madras: Punarvasu.

本田義央

2004 「インド古典修辞学における修辞と感情」『比較論理学研究』2: 31-38.

2005 「ボージャのラサ理論とラサの三段階説」『比較論理学研究』3: 59-74.

2007 「ボージャ著作における特殊な美点 (vaiśeṣikagūṇa) と模倣 (anukarāṇa)」『比較論理学研究』4: 37-41.

(ほんだ よしちか 広島大学 [インド哲学])